

# まぼろしの相国寺七重塔を復元する —金閣寺における九輪断片の発見によせて—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 2016年7月、金閣寺で塔の屋根の上を飾る九輪の断片(写真1)が出土したニュースが大きく報じられました。推定では、その直径は2mを越えるとみられます。現存する日本でもっとも高い木造の塔、東寺五重塔(基壇を含む高さ56m)の九輪の一番大きな部分の直径が約1.6mですから、それをうわまわる大規模な塔であったと推定されます。とすれば、この断片は足利義満が建設をはじめ、完成直前に焼失した北山大塔のものである可能性が考えられます。

義満は、この北山大塔をより以前の応永6年(1399)、相国寺に七重塔を建立していました。この塔は高さ360尺(約109m)といわれ、記録から知られる日本建築史上もっとも高い木造の塔です。北山大塔はこの相国寺七重塔が応永10年(1403)に焼失した後に、場所を北山殿に変えて再建されたものです。北山大塔の高さはわかりませんが、かつての日本人は本当に100mもある塔を建てることができたのでしょうか。東寺五重塔の2倍もの高さです。驚き半分、疑い半分といったところでしょう。

100mの七重塔はありえるか 筆者は以前、高さ81mとされる法勝寺八角九重塔の復元設計をしたことがあります(リーフレット京都 No. 270)。発掘調査からわかった



図1 相国寺七重塔復元CG

塔の地業、すなわち基礎の直径は33mほどでした。これらの寸法にもとづき、時代の近い醍醐寺五重塔〔天曆5年(951)〕の様式・技法を参考にすると、図2のような姿に復元されました。実際の基礎の上に、現存する建築の技法・部材寸法をもって設計できたことから、80m級の高さにも信憑性があるといえるでしょう。一方の相国



写真1 調査で見つかった九輪断片

寺七重塔は、供養されたときの記録に高さは法勝寺の塔に勝ってい

るとされており、100mの塔もあながち否定はできません。

とはいえ、かつて建築史学者の天沼俊一氏が復元設計した100m級といわれる東大寺七重塔は、初重の軒の出が約8.2mとなり、東寺五重塔の約5.2mをはるかにこえる、現実的といえないほどの大きさになっていました。相国寺七重塔はこれを上回る規模です。当然、現存最大の東寺五重塔より大きな木材を使っていたでしょうが、それにしても8mをこえる軒の出をつくる部材があり、さらには重い屋根を支えることができたのか。建築学の立場からは、そもそも100m級の七重塔は設計できるのか、という問題があるのです。

#### まぼろしの七重塔の復元に挑戦

筆者は数年前から相国寺の復元設計に取り組んできました。今回は、時代の近い興福寺五重塔を参考にしました。興福寺五重塔は、高さこそ東寺五重塔におよびませ

んが、軒の出は少し大きく約5.3mあります。それにしても部材をそのまま使って100mの七重塔を設計すると、軒の出が小さくて室町時代の建築らしい姿になりません。試行錯誤を重ねた結果、部材をいくぶん大きくし、軒の出は約6.1mとしました。また、興福寺五重塔・東寺五重塔とも一辺の柱間の数は3間なのですがとても足りず、5間としました。初重には、法勝寺と同じく、裳層とよばれる附属の屋根が付きま

す。屋根については、記録に「七重のいらかゝさなり」とあるので葺の屋根、つまり瓦葺と考えたくなります。しかし、周辺から沢山の瓦が見つかったという報告はありません。今回の復元では、瓦葺のような屋根を木で作った木瓦葺と考えました。木瓦葺の代表は中尊寺金色堂〔天治元年(1124)〕で、その屋根は一見すると瓦葺のようですが、実は木できています。

木瓦葺は瓦葺にくらべ格段に軽く、大きな軒の出をつくるにも有利です。こうした考証により仕上げたのが図1の復元CGです。基壇は一辺約36mになりました。

東寺五重塔とくらべると、どれだけ大きかったかがわかります。もともと京の一条大宮にあったとされる、繊細優美な浄瑠璃寺三重塔とのちがいは、塔という建築の意味をあらためて考えさせられます。

ともあれ、復元は研究の一段階にすぎません。今後、新たな文献史料や基壇・部材の発見により、復元が変わってくるかもしれません。調査・研究の進展に期待が膨らみます。

(京都大学 富島義幸)

〔付記〕東寺五重塔・興福寺五重塔の立面図は『日本建築史基礎資料集成11』（中央公論美術出版、1984）より転載、相国寺七重塔復元CG、同立面図・法勝寺八角九重塔の復元図面は竹川浩平が作成。

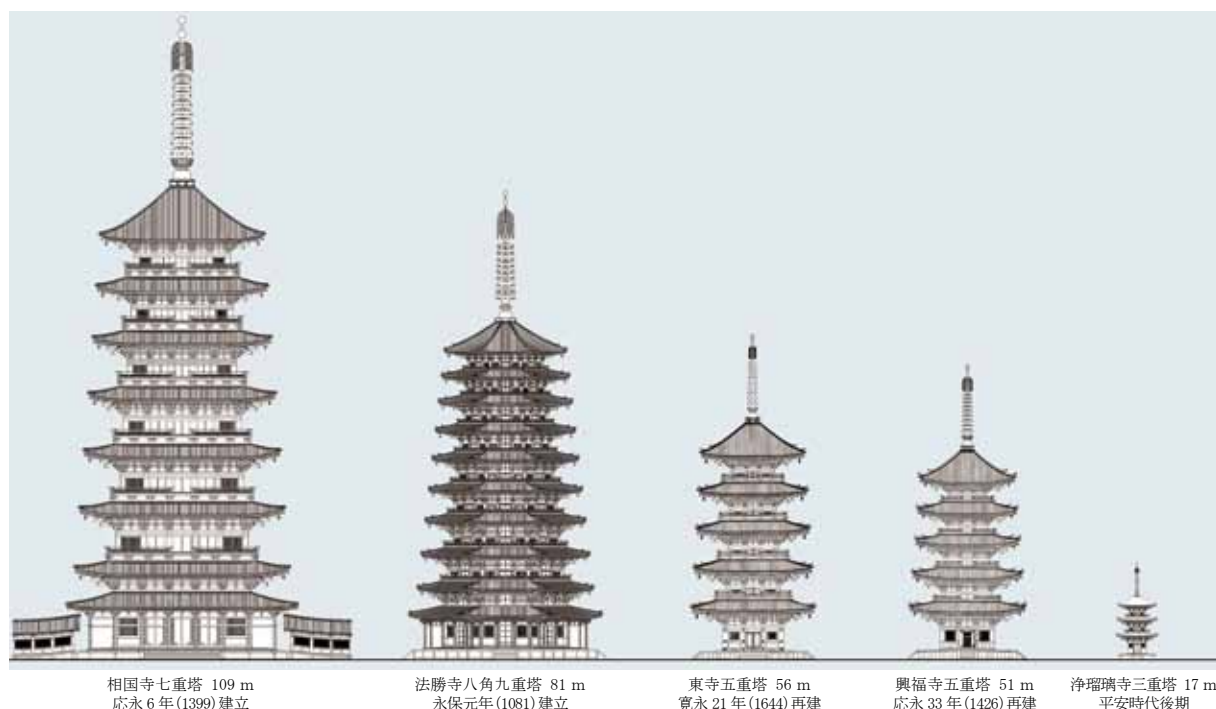


図2 京の塔の高さ比べ (付 興福寺五重塔、いずれも地面からの高さ)